

# マティアス・ストリングス

Pick up artist

Matthias Strings



齋藤真知亜 ヴァイオリン / 降旗貴雄 ヴァイオリン / 坂口弦太郎 ヴィオラ / 宮坂拓志 チェロ

壮大な原曲のイメージをそのままに  
端正な響きの《モツレク》弦楽四重奏版

「使命」と感じた今回の録音  
試行錯誤は旋律や  
歌詞の一節まで

「オーケストラの楽員で、室内楽奏者で、クリスマスチャンの私は、今回の録音を使命のように感じていました。そう穏やかな眼差しで語るのは、NHK交響楽団の第1ヴァイオリン・フォアシュピラー、齋藤真知亜。彼の名前を冠した弦楽アンサンブル、マティアス・ストリングスは、2014年にJ・S・バッハ《ゴルトベルク変奏曲》の弦楽三重奏版をリリース。緻密でフランス感覚に優れた表現が、多くのファンや専門家から高く評価された。それから約2年、今回は西洋音楽史上最大の天才作曲家・モーツァルトの絶筆となった《レクイエム》の弦楽四重奏版のおそらく日本初となる録音を行った。共演は、降旗貴雄(VN)、坂口弦太郎(Ve)、宮坂拓志(Vc)。いずれもN響の同僚で、齋藤が白羽の矢を立てた若き実力派だ。

「録音として後世に残すならば、若い人たちがやりたいと思って、この3人に声をかけたんです。楽譜は、ペーター・リヒテンタールが1826年に出版した弦楽四重奏版をベースに丹念に改編。歌詞のメッセージにこだわりながら和声などの楽曲の構築性も失わないよう、旋律や歌詞の一節にまで試行錯誤を重ねました」

この偉大な傑作を弦4本で表現する難しさと聴きどころ  
チェロの宮坂によると、今回の録音は驚きの連続だったそうだ。

「僕はそもそも、この弦楽四重奏版の存在を知らなくて(笑)。さらに真知亜さんの編曲譜は、チェロ・パート冒頭のヘイントロイトウスからリヒテンタール版とかなり違っていてビックリしましたね。他にも、倍音の引っ張り方を各曲で変えるなど、細かい工夫を凝らしました」

第2ヴァイオリンの降旗は、全員が納得するまで議論を重ねた日々を、まるで音大時代に戻ったような気分でした」と笑いながら振り返る。

「特に思い出深いのが、第7曲《フリモッサ(涙の日)》。内声の僕が歌詞を担当するので、真知亜さんから編曲を「宿題ね」と任されて、和声の中における自分の動きに注意しながら、必死で頑張りました(笑)」

意外なことに、N響でモーツァルト《レクイエム》を演奏した経験は皆無だという4人。共演してみたい指揮者を尋ねたところ、ヴィオラの坂口ら、全員から同じ答えが返ってきた。

「一人は、N響の桂冠名誉指揮者だった故ヴォルフガング・サヴァリッシュさん。そしてもう一人は、今年のベートーヴェン《第九》でも共演する、ヘルベルト・フロムシュテットさんですね。彼は実に知的で構築性の高い指揮者であることに加え、敬虔なクリスマスチャンでもあります。言葉と心の限りを尽くす彼のリハールでは、きっと多くのことを学べると思うのです」

## マティアス・ストリングス

Matthias Strings

■齋藤真知亜(ヴァイオリン)

1962年東京生まれ。86年にNHK交響楽団に入団。現在、同響第1ヴァイオリン・フォアシュピラー。東京音楽大学非常勤講師。

■降旗貴雄(ヴァイオリン)

東京藝術大学付属高校を経て、同大学を卒業。2003年にNHK交響楽団に入団し、現在、第1ヴァイオリン奏者を務める。

■坂口弦太郎(ヴィオラ)

NHK交響楽団ヴィオラ奏者。東京藝術大学を経て、同大学院音楽研究科修士課程器楽科室内楽専攻(ヴィオラとピアノの二重奏)修了。

■宮坂拓志(チェロ)

桐朋学園高校音楽科を経て、同大学を卒業。その後、N響アカデミーを経て、現在はNHK交響楽団チェロ奏者として活動中。

### 【新譜情報】

『モーツァルト：  
レクイエム 弦楽四重奏版』

収録曲/  
W.A.モーツァルト：  
レクイエム 二短調 K.626  
(弦楽四重奏版)  
マイスター・ミュージック/  
MM-3090 / 3,240円(税込)  
2016年10月25日発売

### 【公演情報】

12月28日(水)18時より  
タワーレコード渋谷店  
7Fクラシックフロアにて  
ミニコンサート&サイン会予定



取材・文：渡辺謙太郎